

# 清原貞雄博士をしのぶ

中 野 幡 能

私が先生のお名前を存じあげたのは、東京大学の研究室で「神道沿革史論」という本を拝見した時であります。そして先生の恩師京都大学の三浦周行先生の序文によって一層親しみを深くしました。それは先生が同じ大分県の御出身であるということ、この著書が若冠三十四歳の新進学士の業績であること、更に又神祇史、神道説しかなかった我国神道学界に神道思想史を扱った著書としては始めての概説書であるということなどであります。

先生は大正八年この著書を御出しになってから、次々と思想史、道徳史関係の著書一五冊を精力的に出されています。これ等の研究が総合されて昭和七年四七才の時には、この本は「神道史」と名を改め改訂出版が行われ、沿革史論とは大分趣を異にいたしています。「神道史」という新しい学問上の名称と共に非常な反響を呼びました。時代の反映のみではないと存じます。そしてこの改訂本には大正一五年四一才にして受けられた学位論文もこれに加えられたのであります。そのため一般にはこの著書全体が先生の学位論文だといわれてきました。爾後「神道史」は我が国神道学を志す者の必読の書になったのであります。

この間先生は又もや道徳、思想史関係の一七種許りの出版を行われていますが、昭和一五年には「神道史」は又改訂され、既に六版を重ねています。勿論その間の御研究の成果が、この「神道史」の改訂に集約されたことと存じます。以後神道史は次の昭和一六年にも改訂七版、一七年にも改訂八版、一八年にも改訂九版と版を重ねてまいりました。学術書としては全く珍

しいことであります。昭和一五年第一回の改訂が行われてから第四回の改訂の行われた昭和一八年迄の間にも、古代から近世に亘る幅広い思想史関係の著書八冊、更に一九年にも四冊の著書が出されています。

このように先生の学者としての御研究は多方面に亘り大部の著書がぞくぞく出されていますが終始一貫改訂され続けた本は実に「神道史」であります。他の著書は神道史完成のための外殼的御研究ではなかったかと存じあげる位であります。かかる意味から私は先生は永遠に神道史の先生であるとひとそかに考えています。

戦後私も故郷に帰り、いささかその設立に関係した大分県史料刊行会が出版後、始めて直接先生に御目にかかりました。それは昭和二十七年のことです。雨の日でした。先生は長靴をはいて単身教育研究所にお出になりました。私は今まで多くの神道学者におめにかかっています。著書を通じて親しみつづけていた先生であります。ところが初対面の印象は全く予想に反した先生でありました。全然資格ばった所はなく、失礼な言葉をお許し頂くならば、「ホントウにいいおぢいさん」という感じでありました。困苦しく御待ちしていた研究所の我々はホットしたことであります。爾後十余年私共は温情にあまえつづけてまいりました。先生は人に食事を下さるのがとてもお好きのようでありました。一年一度必ず史料刊行会の職員をお宅にお招きして下さいました。私共は随分恐縮していたのでありますが、何か先生はそれがお楽しさうでありました。史料ではよく先生と合宿しましたが、先生は朝早くから起きられて殆んどモノもおっしやらずに仕事をされます。然し時々お酒が入るとよくヨーロッパの時などの面白いお話も出ました。

ある時私は先生の著書の多いことについておききしたことがあります。そうしたら先生は「恥づかしくてならない。集められるものなら皆集めて焼いてしまいたい気持だ」とけんそんなされていましたが、重ねてどうしてあんなに沢山の著書ができたかをおうかがいしたら、「私の講義は毎年新しいノートを使った。その為一年間の講義が終るとそれを出版した」という意味のお話をおききしたことがあります。私共教師にとって、はまことに考えさせられるお言葉だと思っています。

思い出はつきませんが、先生とお別れして半年、全くうそのような気がしてなりません。戦後の神道学界は随分変りました。

先生方の時代とおよそかけ離れた所もございます。しかし、私はどんな神道学説が出ようとも、先生の「神道史」だけは必ず通らなければならないのだと信じています。その意味で先生はやはり永遠に神道史の先生として生き続けられておいでになると思っております。